

アウトリーチ

通信



第23号

2014年3月20日発行
年2回発行

神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

子どものための コンサート・シリーズ

オルガン・コンサート

十一月二十三日(土、祝)十一時から本学講堂で「子どものためのオルガン・コンサート」おはなしオルガン『ロバの王子』(「子どものためのコンサート・シリーズ」第三十七回)を開催しました(一時間、来場三百二十五名)。

出演は日本を代表するオルガニストの松居直美さん(聖徳大学音楽学部教授で、今年度から



本学音楽学部非常勤講師として毎週東京から来校下さっています。神戸女学院オルガニストの片桐聖子さんと西山聡子さんの助演を得て、講堂二階の大オルガン(三段鍵盤、三十五ストップ、パイプ二千五百三十六本)でのソロはもちろん、舞台右脇の中オルガン(二段鍵盤、九ストップ、パイプ五百九十本)や移動可能な小オルガン(ポジティブ・オルガン、一段鍵盤、三

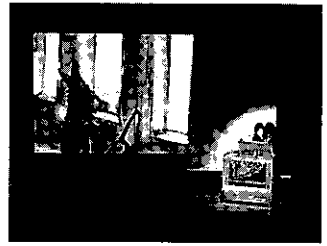
ストップ、パイプ百四十七本)も舞台上手に登場して、大中小三台のオルガンを駆使した多彩なプログラムを展開しました。

「おはなしオルガン」は子どもたちに親しみやすいお話を、美しいイラストと名曲の数々で綴るコンサートで、今回はグリム童話の「ロバの王子」(あらすじ参照)をイラストレーターの大鹿智子さんの描いた幻想的な絵と共に進めました。舞台上にスクリーンを下ろして、



そこにイラストを映写し、三人のオルガニストがお話と演奏を分け合いながら進めます。演奏曲目については、あくまでバロック以降のオルガンの名曲で構成し、子ども向きに迎合することとはしないという方針で松居直美さんに選曲して頂きました。その結果、次のようなプログラムとなりました。

まず大オルガン(西山、以下括弧内は敬称略)のヴィエルヌ作曲(ウェストミンスター)の鐘で開幕し、松居直美さんが舞台に登場してお話を語り始め、小オルガンでウィリアム・バード(ロウランド)より、続いて中オルガンでフローベルガー(ヘトツカータ・レヴァツィオーネ)、魔法使いの呪いの場面では大オルガンでクレランボー《第二旋法の組曲》より(グラン・ジュのカプリース)を演奏しました。ロバの王子のさびしさを描くシ



きところでは神にのみ栄光あれ」より、J. S. バッハ「フーガ ト短調」BWV五七八の三曲が奏でられました。

ロバの王子がさすらいの旅をする場面では、大オルガン（片桐）でフランク「前奏曲とフーガ、変奏」より前奏曲、中オルガン（松居）と小オルガン（西山）の二重奏でバッハ「ソナタハ短調」より第二楽章、同じく二重奏（片桐、西山）でバッハ（主よ、人の望みの喜



ーンでは、びよ」を演奏しました。

ロバの王子が遠い国に着いてからは、大オルガン（松居）でクレランボー「第二旋法の組曲」より「ナザールのレシ」とクーブラン「教区のためのミサ」より「オフェルトワール」、ロバの王子の張り裂ける思いは小オルガン（松居）の「スヴェーリンク（パドヴァーナ・ラクリメ（涙のパヴァーヌ）」より、大オルガン（片桐）の「バッハ（主よ、我なんじを呼ぶ）」BWV六三九で表現されました。ロバの王子の呪いが解ける場面では、小オルガン（西山）の「ヘンデル『水上の音楽』第一組曲より（エア）、同第二組曲より（ホルンパイプ）」を大オルガン（松居）と中オルガン（片桐）の二重奏で演奏し、最後の「めでたしめでたし」は大オルガン（松居）の「バッハ（ピエス・ドルグ）」BWV五七二で華やかに締め括りました。

イラストとお話と演奏をシンクロさせて進行するのは本シリーズ初の試みで、むしろ嬉しい部分もありましたが、すぐれた出演者を得て、楽しみながらオルガンの魅力をたっぷり味わえるコンサートになりました。

終演後



には、大オルガンの見学ツアーと中オルガンの楽器体験を実施し、子どもたちが行列して参加しました。

お客様アンケートでは、「お話と一緒に、楽しみながらオルガン曲に触れることができた」「絵本を読むだけでなく、すてきな音と共にお話を聴くのは子どもにも大人にも楽しい時間」「お話に合わせたの選曲がすばらしく物語りのイメージがふくらんだ」といった声が寄せられました。

た。また、「お世話してくださる学生さんたちも皆さん感じがよかった」という声もあり、学生たちが心を込めて対応していることが伝わっているのをうれしく思いました。

最後に、イラスト再使用にご協力下さったミューザ川崎シンフォニーホールに御礼申し上げます。（アウトリーチ・センター長 津上智実）

「ロバの王子」あらすじ

むかしむかし、ある国に幸せに暮らす王様とお妃様がいました。幸せな二人に、ただ一つ手に入らないものがかわいい子ども。魔法使いの呪文でようやくとの約束を守らなかったためロバの子どもが生まれてしまいます。その姿ゆえ王様とお妃様から愛されることのなかったロバの王子は、真実の愛を求めて楽器のリュートを片手に一人で旅に出ます。そして、その旅先でロバの王子が出会ったものは……

クリスマス・コンサート

十二月十四日（土） 本学講堂

において「子どものためのクリスマス・コンサート」聴いて歌って動いて感じよう♪」（「子どものためのコンサート・シリーズ」第三十八回）を行いました（第一部十一時、第二部十五時半開演、来場計六〇〇名）。

出演は「アンサンブルたまでばこ」のメンバーの声楽・藤田理世、ピアノ・橋本美奈子、大澤侑子とヴァイオリンの井上佳那子（賛助出演）の四名。「アンサンブルたまでばこ」は、大学を卒業後、「音楽によるアウトリーチ」の履修生を中心に結成し、病院や高齢者施設・幼稚園・自治会・ホテルなどで演奏活動を行っているアンサンブル・グループです。

今回のコンサートでは、副題にある通り、音色やテンポなど

から「音楽の表情」を体で感じとってもらうことを目的にプログラムを組みました。

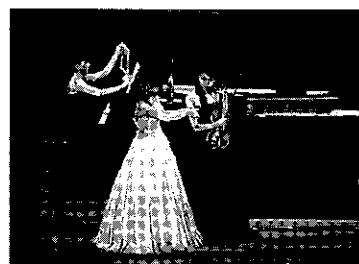
開演を知らせるオルガン演奏（オルガン・追中宏美）の後、

出演者四名が舞台下へ並んでトーン・チャイムで（きよしこの夜）を奏でて、いよいよ開幕です。まずはメンバーそれぞれの演奏です。曲目解説は挟まず、

二台のピアノでチャイコフスキー「くるみ割り人形」より〈序曲〉、歌のソロでアルディーティ（くちづけ）、続いてヴァイオリンが客席後方からモンティ（チャルダッシュ）を演奏しながら



登場しました。音楽を身近に感じてもらえるようお客様のすぐそばで演奏しました。

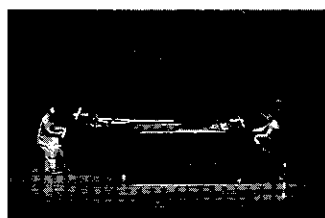
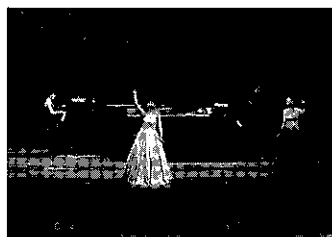


次にヴァイオリンの説明へと移ります。音の鳴らし方を始め、フラジオ

レットやピッチカートといった技法を実演つきで紹介しします。

分數ヴァイオリンを見せて、年齢や身長に合わせて使い分けること、一番小さなヴァイオリンでも一人前に音が鳴ることを対話形式で説明しました。ヴァイオリンと歌とピアノでラフマニノフ（ヴォカリーズ）を演奏し

た後、今度は「音楽の表現」の違いを体感しようと呼びかけて、会場参加のこ

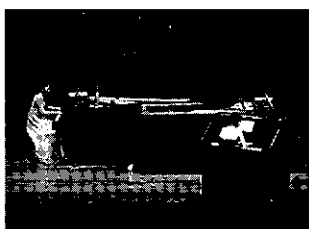


ナーです。おなじみのヘジングル・ベル」を王様やネズミさんになったつもりで、堂々と歌

ったり、大急ぎで歌ったりしました。続いてサン＝サーンス《動物の謝肉祭》より〈象〉を二台ピアノ、〈白鳥〉をヴァイオリ

ンで演奏し、チェレスタの楽器紹介をした上でチャイコフスキー「くるみ割り人形」より〈金平糖の踊り〉をピアノとチェレスタで演奏しました。

次に、ピアノという楽器はオーケストラと同じだけの広い音域を持っていると説明してからサン＝サーンス（死の舞踏）を演



奏し、二台ピアノの演奏の迫力を感じてもらいました。

続いては、ウィーン・フィ

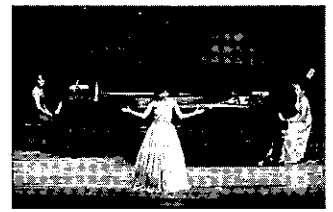
ルハーモニー

管弦楽団のニューイヤークンサートでおなじみのヨハン・シュトラウスⅡ世「ラデツキ行進曲」です。緩急・強弱などのメリハリをつけて演奏し、会場の皆さんには手拍子で参加して頂きました。

演奏会も終盤に入り、クリスマスの意味を説明してから「オー・ホーリー・ナイト」と二台ピアノによる「クリスマス・メ



ドレー」を演奏し、雰囲気を感じてもらいます。最後に「赤鼻のトナカイ」と「もろ



びとこぞりて」を会場の皆さんと元気に歌って演奏会の幕を閉じました。

今回は出演者が四名で楽器の種類が少なかったため、演奏会の構成をどのようにするか随分悩みました。試行錯誤の末、辿り着いたプログラムでしたが、お客様の会場アンケートからは、「音楽で何を描写するかという統一したテーマで選ばれていてよかった」

「子どもから大人まで楽しめた」「一時間があつという間だった」といった声を頂いて、めざしたことが伝わった様子でうれしく思っています。



コンサートの実現に当たっては、大勢の方のサポートがあつ

たからこそとつくづく感じています。澤内崇先生には舞台上のスムーズな進行についてアドバイスを頂き、津上智実先生には演奏会全般に渡って学生時代さながら何度も助言を頂きました。アウトリーチ・センターのスタッフの皆さんには勤務時間以外にも迅速な対応を頂きました。前日のリハーサルから一緒に舞台を作り上げてくれた学生スタッフはもちろん、このコンサートに携わって下さったすべての方に出演者一同、感謝の気持ちでいっぱいです。

大学を卒業して早五年が過ぎようとしている今、このような機会に恵まれたことに感謝いたしますと共に、この貴重な経験を糧に「アンサンブルたまたまこ」として、これからもいろいろな方へ音楽を届けていきたいと思っています。

(大澤侑子・記)



学外アウトリーチ

兵庫中央病院

十月十一日（金）十四時半から国立病院機構兵庫中央病院（三田市大原一三二四）三階デイルームにて四十五分間のオータム・コンサートを行いました。（ホルン・増田明日香、ハープ&ピアノ・田中茜、フルート・廣瀬紀衣、山川美和、声楽・山田絵梨香、ピアノ・山本里紗）



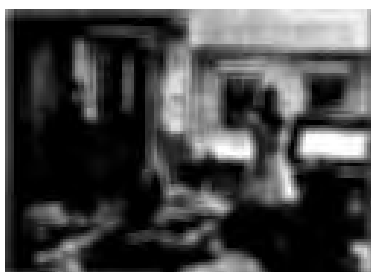
まずは出演者全員でアーレン作曲「虹の彼方に」を演奏し、続く挨拶では「虹の向こうにはすばらしい世界が待っている」という歌詞から、今日は私たちの演奏でいろいろな音楽の世界をのぞいてほしいと伝えました。次にハープ独奏でサン＝サーンス作曲「ファンタジー」を演奏し、ふだん聴くことの少ないハープの音色を楽しんで頂きました。雰囲気を変えてピアノ、フルート二本、ホルンのアンサンブルでチャイコフスキー《くるみ割り人形》より「行進曲」。色々



な楽器を前に目移りしている患者さんの様子が印象的でした。続いてマスカニー「アヴェ・マリア」をハープとフルートの伴奏で独唱しました。次はピアノ、フルート二本、ホルン、声楽の五人で「まつかかな秋」「ちいさい秋みつけた」「村祭」「もみじ」の《秋メドレー》を演奏。患者さんも自然に口ずさんで下さって、季節感を感じて頂けたようです。ここでフルート二本の《愛の挨拶》に合わせて会場の皆さんと軽く体操をしました。体が気持ちよくほぐれたところで、（見上げ



てごらん夜の星を）（上を向いて歩こう）《故郷》を会場の皆様と一緒に歌いました。多くの方が歌って下さって会場に一体感が生まれました。



終演後にアンコールを頂き、リクエストに応じて《秋メドレー》をもう一度演奏し、皆さんにも歌って頂きました。

病院という閉じられた空間だからこそ季節感を味わって頂きたいと考えて、日本の歌も取り入れ、患者さんと一緒に楽しめるプログラムを構成しました。演奏を患者さんが聴いて下さっていることを強く感じると共に、私たちの演奏で何か感じて下さっていることが見ていて伝わってくる演奏会となったことをうれしく思っています。

（山川美和・記）



春風幼稚園

十一月十二日(火) 十時から

西宮市立春風幼稚園(西宮市今津野田町二・六)のホールにて

園児を対象とする「きいて、うたって、秋のきらきらコンサート」(四十分)を行いました。出

演は、田中茜(ハープ)、増田明日香(ホルン)、山田絵梨香(声楽)、廣瀬紀衣(フルート)、山

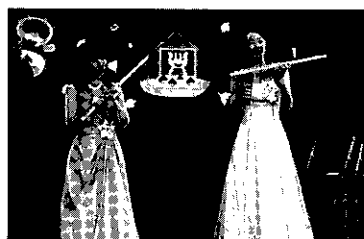
川美和(フルート)、松尾璃奈(ピアノ)、山本里紗(ピアノ)の七名です。

「クラシックって楽しい」と子どもたちにも親しみをもって

もらえるようにプログラムを考えました。

コンサート

の幕開けは、アーレン作曲(虹の彼方に)を歌とピアノ、フル



名前を質問するなど、対話を大切にしながら進めました。

次は、モーツァルト作曲(きらきら星変奏曲)。先ほど紹介した楽器からどんな音が聴こえてくるのか、耳を澄ませて聴いてもらいました。

次はマスカニニ作曲(ヘアヴェ・マリア)。歌とハープとフル

ートの演奏です。ゆったりとした曲の次は、チャイコフスキー作曲

の演奏です。ゆったりとした曲の次は、チャイコフスキー作曲

の演奏です。ゆったりとした曲の次は、チャイコフスキー作曲

の演奏です。ゆったりとした曲の次は、チャイコフスキー作曲

の演奏です。ゆったりとした曲の次は、チャイコフスキー作曲



《くるみ割り人形》より《行進曲》です。この曲では、子どもたちが行進したり飛び跳ねたりする様子をイメージしながら聴いてもらいました。

次はアクティビティで鈴木翼作曲(かみなりどんがやってきた)です。歌に合わせて頭やおへそなど隠す部分が増えていきます。出演者は全員、手作りの鬼の角をつけて園児たちの中に入って混じりました。

みんなですっかり声を出した後、久石譲作曲(さんぽ)を元

気よく合唱しました。次はアンダーソン作曲(ワルツィング・キヤット)で猫の鳴き声

を子どもたちにも一緒にまねてもら

いました。出演者は全員猫耳をつけて参加。クラシックにも楽しくておもしろいもの

があると感じてくれたことと思います。美しいメロディーの曲としてドビュッシー作曲《前奏曲集第一集》より《亜麻色の髪の乙女》をピアノ・ソロで演奏。

最後は、春風幼稚園園歌をピアノとフルートによる伴奏で皆で一緒に歌いました。曲だけでなく司会の内容も工夫すること



園児たちはクラシックの演奏にも耳を傾けてくれたと思います。

(山本里紗・記)



大阪市立総合医療センター

十一月二十九日（金）十四時半から大阪市立総合医療センター（大阪市都島区都島本通二・十三・二十二）さくらホールで「ウインター・コンサート」（四十五分）を行いました（ソプラノ・山田絵梨香、ホルン・増田明日香、フルート・廣瀬紀衣、山川美和、ハープ・田中茜、ピアノ・山本里紗）。

ふだん病院の中では感じにくい「季節感」や「豊かな時間」をキーワードに、日本の歌なども取り入れて、お客様と一体感



を大切に一緒に楽しんで頂ける

コンサートをめざすと共に、グランド・ピアノのある環境を活かしたプログラムを皆で考えました。

オープニングでは、これから私たちの演奏を通していろんな世界をのぞいて頂きたいという思いを込めて、アーレン（虹の彼方に）を全員で演奏しました。次にサンリサーンのハープ曲（ファンタジー）を演奏し、ふ

だん耳にすることのないハープの魅力に触れて頂きました。かわいらしく賑やかな子どもたちの様子を描いたチャイコフスキの組曲《くるみ割り人形》より（行進曲）を器楽アンサンブルで演奏したところ、前の席で聴いていた女の子の表情が変わるのが見えてうれしく思いました。再びハープが登場し、デラックア（ヴィラネル）をソプラノとのアンサンブルで演奏しました。立派なグランド・ピアノ



の音色をさくらホールに響かせようと、ドビュッシー作曲《前奏曲集》第一巻

より（亜麻色の髪の乙女）をピアノ独奏で演奏した後、ソプラノ、ホルン、フルート二本、ピアノで山口景子編曲《秋メロレ》（まっかな秋・ちいさい秋みつけた・村祭・紅葉）を演奏しました。紅葉は一緒に口ずさんでくださる方もあって、日本の歌の大切さを改めて感じました。フルート二重奏によるエルガ



「（愛の挨拶）に合わせて会場の皆さんに体をほぐしてもらった後、中村八大（上を向いてあるこう）と文部省唱歌（ふるさと）を皆さんと一緒に歌って、会場が一つになった気分になりました。アンコールには、少し早目のプレゼントとしてバーリン（ホワイト・クリスマス）をメンバー全員で演奏しました。

演奏中はあちこちでお客様の笑顔が見られましたし、終演後、



病室に帰られる患者さんたちをお見送りした際には声をかけて下さる方も多く、聴いて下さった方々の心に少しでも私たちの音楽が届いたことをうれしく思いました。

（廣瀬紀衣・記）

雲雀丘学園小学校

十二月十一日（水）午前、雲

雀丘学園小学校（宝塚市雲雀丘

四の二の一、音楽教諭山本雅子

先生、岡村圭一郎先生、藤原道

代先生）の講堂で四年生四クラ

スを対象にアウトリーチ実習を

行いました（ハーブ・田中茜、

小原彩乃、寺澤彩、フルート・

山川美和、声楽・山田絵梨香）。

今回の実習は「聴いて感じよ

う！触って感じよう！楽器の女

王ハーブ」というテーマで、な

じみのないハーブという楽器を

身近に感じ、深く知ってもら

ことを目的にプログラムを考え

ました。

まず、パ

ッヘルベ

ルの《カノ

ン》をハー

ブ二重奏

で演奏し



ました。クラシックの中でも有名な曲ということもあり、「これ知ってる！」という声が会場から聞こえてきました。

次に、楽器の構造を配布資料

と実演

で説明

し、そ

の際、

視覚的

にも分かりやすいように工夫し

ました。その上でサルツエード

の（夜の

歌）をハ

ーブ独奏

で演奏し

ました。

この曲は爪で弦を鳴らしたり、

ハーブの胸を手で叩いたりする

特殊奏法が満載で、生徒たちも

びっくりしつつ興味津々の様子

でした。

ハーブはアンサンブルも得意

な楽器であることを知ってもら

うため、ビゼーの《アルルの女》

より（メヌエット）をフルートとの二重奏で演奏しました。続いてマスカーニの《アヴェ・マリア》を、フルート、ハーブ、声楽という私たちのアンサンブルに合わせて、生徒たちにリコーダーで旋律を吹いてもらって一緒に演奏しました。初めての試みで、最初のクラスではなかなかコツを掴むのがむずかしかつたのですが、タイミングよく声掛けすると生徒たちの集中度も上がりました。一生懸命吹いてくれる生徒たちと合わせるのは、楽しいひとときでした。



れたのが印象的でした。

各四十五

分で四クラ

スを続けて

実施するの

は、思った

より体力の要ることでしたが、

回を重ねる度に私たちもいろ

ろと学ぶことができました。実

施前には、小学生向けに少し踏

み込んだ内容の楽器紹介をする

練習に苦労しましたが、どのク

ラスも生徒たちの反応がよくて、

とてもうれしかったです。この

体験を今後の演奏活動にも活か

していきたいと思います。

（田中茜・記）



子どものための

音楽づくりワークショップ

十一月十六日(土) 九時半から十六時まで本学エミリー・プラウン記念館地下のスタジオAで第四回「音で遊ぼう!子どものための音楽作りワークショップ」を開催しました。これは三大学(東京音楽大学、昭和音楽大学、本学音楽学部)連携による四日間の「音楽ワークショップ集中研修」(十一月十三、十六日)の最終日に、学生の学びの仕上げとして実施したものです。指導には英国ロンドンのギルドホール音楽院でリーダシップ・コースのプログラム・リーダーを務めるシグルン・セヴァルスドツティル・グリフィス先生を招聘し、



学生等三十六名と子ども十八名の計五十四人が参加しました。

学生側の内訳は、本学学生二十七名(一年生四名、二年生十名、三年生九名、四年生四名)に加えて、東京音楽大学三名、昭和音楽大学一名、桐朋学園大学一名、上野学園大学短期大学部一名、洗足学園音楽大学一名、一般二名と、学外からも合わせて九名の参加がありました。

まずは全員で大きな輪を作つてアイス・ブレイクをした後、歌、管楽器、弦楽器、リズム楽器の四グループに分れて、それぞれの音楽作りに取り組みました。子どもの年齢が全体に低かったので(五歳児二名、六歳児二名、七歳児八名、八歳児一名、九歳児二名、十、十一、十二歳児各一名)、キーワードからイメージを引き出すのに苦労したグループもありました。事前に講師と学生たちで準備していた音



因となったようです。

お昼休みにはグループ毎にご飯を食べて散歩したり一緒に遊んだりしたことで、子どもたちもほぐれて、午後のハードな練習を乗り切ることができました。

最後に、一日かけて皆で作った音楽をお迎えの保護者の前で演奏して、温かな拍手をもらいました。学生と子どもたちで振り返りの話し合いをし



楽が六拍子で大きな跳躍進行を含むものだったことも、苦勞の一

た後、神戸芸術工科大学の曾和具之先生作成のリアル・タイム・ビデオを映写しました。

学生からは「ふだんは書かれている音譜やコードを見て弾くことが多く、何もないところから皆で音楽を作っていくのはむずかしかったけれど、おもしろかった」、子どもからは「いろんなことを考えて工夫して、とても楽しかった。皆で合わせるところが特に楽しかった。また来たい」といった感想が寄せられました。

当日は、本学大学院通訳コースの中村昌宏先生と奥村キャサリン先生の指導の元、院生三名(藤島京子さん、住本真衣香さん、豊島知穂さん)が逐次通訳で子どもたちや学生と講師のグリフィス先生とを繋いでくれたことを記して感謝します。

(津上智実・記)

履修生紹介

四年生(十二期生七名)からの

メッセージ

廣瀬 紀衣(フルート)



四年生になる直前まで、アウト
リーチの履修を
どうするか悩ん
でいましたが、
先輩方の実習を

見学した際、先方の担当者に「来年は頼んだよ」と言われ、自分の意思が定まったことをよく覚えています。今年は履修生が六人と少なく、全員フル出場で大変でしたが、よい仲間にも恵まれ、一年を通してアンサンブルがよくなっているのが分りました。共に活動するチームのメンバーに対する責任と役割、お客様の大事な時間を頂いて音楽を届けることの責任とありがたさを、この授業で学びました。

もし履修を悩んでいる後輩がいたら、一歩踏み出す勇氣を持つてくださいたいと伝えたいです。

増田 明日香(ホルン)



授業を履修するかどうか、始め迷っていた私ですが、今は履修して本当によかったと思っています。

コンサートを一から作るむずしさや大変さがありますが、その分聴いてくれる人々を思い、心を込めて作り上げていくことのやりがいや達成感を感じることができて、ふだん味わえない感動が経験できました。また人前で演奏する機会をより多く得られるので、表現力の向上や客観的に自分を見つめることができるようになります。たくさんさんの人の笑顔を見ることができると素晴らしい授業です。これか

らも素敵なおコンサートを作り上げていってください。

田中 茜(ハープ)



ふだんの試験やコンクールとは違い、聴いている人の表情を間近で見ることができて、音楽で大切なのは演奏の完成度だけではないと実感しました。病院で演奏した時、最前列の患者さんが泣きながら聴いてくれていたのを見て、私自身が思わずもらい泣きしそうになったことは、きつとずっと忘れないと思います。夜遅くまでの話し合いや打ち合わせも今となつてはいい思い出ですし、将来活動をしていく時に必ず役に立つと思います。ここまで支えてくださったスタッフの方々にはもちろん、一緒に活動できた履修生たちに感謝しています。

山田 絵梨香(声楽)



演奏を聴いてくださる方々が何を求めているのか、私たちは音楽を通して何を伝えられるのか・・・アウトリーチの活動

では、これまで深く考えなかったようなことも思慮する必要がある、話し合いが長時間に及んだこともあります。その時のメンバーの顔は忘れられません。でも、それまでにどんなに恐ろしい表情をしていようと、現場に入ればとにかく、演奏中もとにかく、MC中だってとにかく。いつでもどこでもこやかに……なるにはまだ少し時間が掛かりそうですが、これからいい顔といい音楽で、多くの人々をいい顔にしていきたいです。



山川 美和 (フルート)

一回生の頃からセタコンサート



などのスタッフとして先輩方のアウトリーチ活動を見学して、私も

挑戦してみたいという気持ちでアウトリーチを履修しました。ひとつひとつの実習に向けて何度も話し合い、練習を重ねた一年間は私を大きく成長させてくれました。私たちは音楽で何を伝えることができるのか、聴いて下さる方の立場に立って演奏会をつくることで、実習を終えるたびに音楽の可能性を感じる事ができました。来年度の十三期生のみなさんには、私たちとは違う自分たちのカラーを生かして、音楽による出会いを大切にしてほしいと思います。

山本 里紗 (ピアノ)

実習の度に、対象の患者さんや



子どもたちを通して、音楽の力やすばらしさを改めて感

じることができました。また、その力を発揮するにはどのような準備が必要かということも学びました。相手に合わせたコンセプト作りから、プログラムや司会の内容を考え、練習をするのは容易ではありませんが、その先にあるお客さんの反応が原動力になりました。わずかな気持ちの変化や会場の環境が、どのように演奏会の空気作りに影響するのかということも実習を重ねる中で感じる事ができました。学んだこと、経験したことを今後に生かしていきたいです。

上田 美幸 (ピアノ)

中川 真帆 (ピアノ)

野路 美郷 (ピアノ)

藤井 佑衣 (人間科学部)

「音楽によるアウトリーチ(講義)」

履修生(三回生九名)



三木 理花絵 (ピアノ)

小林 佐江子 (ピアノ)

城井 礼衣子 (声楽)

寺脇 優子 (声楽)

今川 裕美 (ピアノ)

♪ 2013 年度 実習履歴 ♪

6月21日	(金)	兵庫県立芦屋特別支援学校アウトリーチ
7月6日	(土)	子どものための七夕コンサート
10月11日	(金)	国立病院機構兵庫中央病院アウトリーチ
11月12日	(火)	西宮市立春風幼稚園アウトリーチ
11月16日	(土)	音楽で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ
11月23日	(土)	子どものためのオルガン・コンサート
11月29日	(金)	大阪市立総合医療センターアウトリーチ
12月11日	(水)	雲雀丘学園小学校アウトリーチ
12月14日	(土)	子どものためのクリスマス・コンサート
3月6日	(木)	国立病院機構 刀根山病院アウトリーチ
3月13日	(木)	特定非営利活動法人もみの木アウトリーチ

音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にてききな音楽のプログラムをお届けします。

♪ 小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
子どものための楽しい体験学習を！

♪ 病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター（月～金 10：00～15：00）

〒662-8505 西宮市岡田山 4-1 TEL: 0798-51-8584 FAX: 0798-51-8551

E-mail: outreach@mail.kobe-c.ac.jp <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

今年の4年生は少数精鋭でよくがんばりました。卒業後にも期待しています。（津上）

あっという間の1年間でした。12期生の活躍を心から願っています！（寺澤）

今年度も盛り沢山の行事を、皆さんと共に頑張ることができて、感謝です！（三上）

12期生のみなさんの益々のご活躍をお祈りしています！（藤野）

センターに勤務してもうすぐ1年！たくさんの感動の場面に出会えました。（木村）